ISSN 1349-7677

図書館だより

第82号

平成19年4月1日

愛媛大学図書館

http://www.ehime-u.ac.jp/KANPO/

＝＝＝＝＝＝　目　　次　＝＝＝＝＝＝

実物にふれるということ・・・・・・・　1
鈴鹿文庫の貴重書・・・・・・・・・・・　3
愛媛大学図書館学術講演会・・・・・　4
学術情報リテラシーシリーズ(第6回)
　　電子ｼﾞｬｰﾅﾙ・ｺﾝﾃﾝﾂｻｰﾋﾞｽ・・・・・・　4
理科年表プレミアムの利用・・・・・　8
ACS ジャーナルの導入・・・・・・・　8
SciFinder Scholar の導入・・・・・・　9
電子ジャーナルに関するアンケート
　　まとめ　・・・・・　10
愛媛大学図書館将来構想案・・・・・・　21
図書館からのお知らせ　・・・・・・・　24
図書館委員会　・・・・・・・・・・・　24
図書館日誌　・・・・・・・・・・・・・　25

実物にふれるということ－大学図書館へのいざない

西　　耕　生

高度情報化の進みつつある昨今においては、図書館の果たす役割もそうした状況にふさわしく衣替えしていく必要を説く風潮が見とめられる。文献目録等を始めとするデータベースや電子ジャーナルの整備だけでなく、所蔵資料によるデジタルコンテンツの充実を図ったりなどして、情報を取り扱う機能を高めようとしているのがその一斑であろう。たやすく現物に接することのできぬ遠隔地などにいる場合でも、手許の端末からアクセスして情報を手に入れることができる利便性を、私たちはもはや手放せなくなっていると評してよいのであろう。

ただし、ここで指向されているあり方が、副次的二次的なレベルにとどまる傾向が強いところには留意しておく必要があろう。充実した情報検索の機能は、実体や本質に附されるタグのようなものなのだから、実体や本質を前提とするはずである。したがって、前者の充実は、後者のそれを反映したものでなければなるまい。

いつでも、どこでも、だれでもが、端末装置のディスプレイを通してかぎりなく現物に近い対象に接することができる。あたかもそれが現実であるかのような感覚。しかしだからこそ、かえって「実感」から遠く隔たっていることにわたくしどもは気づくべきではないか。もちろん、オリジナルとは何かという定義をなおざりにしようというわけではないけれども、仮想現実はあくまで仮想の域にとどまるのであって、実体なのではない。

先日、「学校と私」というコラムに脳科学者である茂木健一郎という人が寄せた記事の、次のような一節が目にとまった。

> 知識の本質は「開放性」だと思います。それは、何をどこまで学んでも必ずその先はあるということ。答えが決まっていることを、どのくらい早く分かるようになるかというのは「学び」の本質ではない。

今の時代に何かを学ぶところは、必ずしも学校だけとは限らない。昔「知」は学校にしかなかったけれども、今はインターネット上にもある。

（平成１９年〈２００７年〉２月１９日付、毎日新聞）

インターネット上の情報の内容や実質についてにわかに論評することは困難だけれど、たしかにその普及によって、「知」への接触の場が広がっているように思われる。そうして、「学び」の本質に対する言及も示唆深いであろう。ただ、現在では学校のほかに「知」の存するところもあるという主張には、首肯できる部分とそうでない部分とが相半ばする。「学び」の場はいつの時代でも学校に限られるわけではないからである。学校は、いやむしろ、学校も、それぞれの人にとって「学び」の一つの契機にすぎないと言うべきだろう。

「学び」には、独学という方法もあるけれど、一方でそれは、独善への危うさも蔵している。学校でまなぶことの意義は、長幼の序や男女の別、ひいては師弟の立場をも超えて、心ざしを同じくする仲間どうしが切磋琢磨するところにある、と示された恩師の言葉を思い出す。どこまで学んでも必ずその先があるという「知」へのあくなき探究。答えを得ることが、新たな問いを見出すことでもあるということ。「学び」へのそうした環境がしかるべく用意された、人びとのつどう場所が学校であり、その象徴が図書館にほかならない。

大学図書館には、この意味において、どこでもだれでもが所有することのできぬモノを収集保存管理する責務が与えられているだろう。本学の中央図書館には、鈴鹿文庫をはじめ、寄託資料として堀内文庫や江嶋家文書など、貴重なコレクションが現蔵せられている。図書館のホームページからは、これら主たる収蔵資料を精細なデジタル画像で見ることもできるけれど、ディスプレイ上でふれるのにはおのずから限界があろう。新入生としてせっかく図書館を身近に活用できる環境になったのだから、いずれ機会を設けて実物にふれてほしいと思う。

もとより書物も、実体そのものではない。文学作品を例にとるなら、そこにあるのはたんなる文字の羅列でしかない。読むという主体的行為によってはじめて作品は私たちに現象するのである。「良書の要約というものはすべて愚劣なものだ」（モンテーニュ『エセー』）。ただ、先人たちが《いま - ここ》という制約を超えようとして編み出した媒体の一つとして、この、書物という存在が私たちへと伝えられていることに思い及ぶとき、書物には、ある実感が伴っているように思われる。それを、実物にふれる感覚だというのはおこがましかろう。しかし、言語等による抽象化をへながらそれを再び具現しうるようなモノとして私たちが書物を捉えるとき、書物という媒体はすぐれて知性的なモノではあるまいか。

高度情報化時代における大学図書館には、情報技術（ＩＴ）の推進が期待される一方で、文字どおりモノとしての書物の収集保守管理がなおざりにされるべき道理はない。もちろん書物も実体を抽象した媒体であることは言うまでもないけれど、二つの志向は互いに依存しており、不即不離の関係にあるものと考えられるのである。大学における図書館は、この二つのはたらきを兼ねそなえたトポスであり、書物は《知の媒体》としての役割を実現する一翼をこれからも担っていくものにちがいない。

僕は顕微鏡を使ってはならない
（自分で一つのプレパラートになって）
僕は望遠鏡を使ってはならない
（自分の脚で距離を消し）
僕は只生まれたての眼だけで見よう
（谷川俊太郎・沢野ひとし［絵］『詩集　十八歳』東京書籍〈集英社文庫所収〉）

「顕微鏡」や「望遠鏡」をすでに持っている時代だから、それらを上手に活用する心構えが必要なのである。「実感」から遠ざかってしまいがちな環境にある現在だからこそ、「生まれたての眼」で見るような「てま」と「ひま」とを惜しんではならぬと、自戒を込めて、みなさんに申し述べる次第である。

（にし　こうせい　法文学部人文学科）

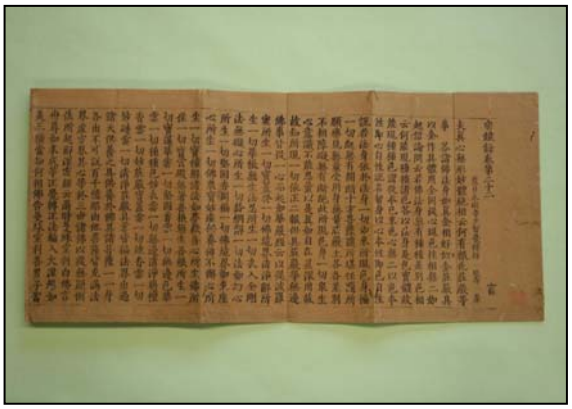
愛媛大学図書館２００６年（開学記念日事業）企画展

鈴（すず）鹿（か）文庫の貴重書

中国「宋」時代の経典 2 巻を発見

愛媛大学図書館が昭和 53 年に所蔵した鈴鹿文庫の中に、中国「宋」時代の経典 2 巻『宗鏡録巻二十二』及び『中阿含経巻五十六』が発見されました。以前よりこれら経典の存在は知られていましたが、平成 18 年 7 月、本学加藤国安教育学部教授、邢東風（シン・ドンファン）法文学部教授による宮内庁・金沢文庫等の関係施設での現地調査と、中国の研究者との協力により、12 世紀の「宋」時代のものであることが確認されたものです。

【宗鏡録巻二十二】



永明延寿著、961 年、100 巻。以心伝心を説き、仏心宗といって、心を中心課題とする禅宗における心と、天台・華厳・法相等の教宗諸派で説く心とが、いかに異同するかをあらゆる例証を挙げて論じ、禅と教を融和会通させようとしたものである。

本学所蔵『宗鏡録巻二十二』は、もとは金沢文庫の宋本「宗鏡録」全 100 巻の一巻だった。この金沢文庫の宋本「宗鏡録」は、８代執権時宗の補佐役として有名な北条実時が、僧定舜を入宋させて求めさせた「一切経」の一部である。紹興（1131－1162）年間以降、開元寺版を部分的に補刻して題記のないものが作られた（毘廬蔵）が、本学所蔵『宗鏡録巻二十二』はこれにあたる。

【中阿含経巻五十六】

愛媛大学図書館では、平成 18 年 11 月 12 日（土）に開学記念日のイベントのひとつとして、本学地域創生研究センターの教員等によるシンポジウム「鈴鹿文庫の貴重書」を開催し、同時に展示会（9 日間）を催しました。展示会にはこの経典のほか、鈴鹿文庫の他の貴重資料も多数公開し、約 400 人の入場がありました。

なお、「鈴鹿文庫」は神道家である鈴鹿三七氏の旧蔵書で、神道関係のほか、和歌、物語、日記など多方面分野の資料を含んでいます。これらの資料はデジタル化しており、愛媛大学図書館ホームページ（http://www.lib.ehime-u.ac.jp/SUZUKA/index.html）から見ることができます。

【学術講演会風景】

平成１９度愛媛大学図書館学術講演会

愛媛大学図書館では、平成１９年２月２０日（火）に、山口大学図書館の大場高志情報環境部長を講師に招き、愛媛大学図書館学術講演会を開催しました。
この学術講演会は、愛媛大学図書館が愛媛地区大学図書館協議会の協賛事業として昭和６２年から実施し、今回がちょうど２０回目の講演会となった。当日は、愛媛県内の加盟大学図書館や県立図書館関係のほか一般参加者も含め４０名近くの参加者がありました。

講演は､｢知の拠点をめざして｣と題して、（１）社会財としての大学のパラダイム転換　（２）学術機関として人材養成と社会貢献　（３)少子高齢化社会への対応　（４）法人化後の国立大学図書館の変化　（５）大学図書館としての基盤整備とサービス業務　（６)学術機関リポジトリの構築　（７）地域貢献として、学術情報流通マネージメント体制への山口大学図書館のマスタープラン等が説明された。　講演内容は今後の大学図書館の方向性の示唆に富むものであり、大学図書館としての学術情報基盤の整備と学生や教員・研究者へのサービス活動および地域貢献としての公共図書館等との連携の必要性などについて、会場からの質疑に答えながら､活発な議論が交わされた。

講演の音声は、下記 URL で視聴することができます。
http://www.lib.ehime-u.ac.jp/EHIME/koenkaikiroku.html

[講演する大場高志山口大学情報環境部長]

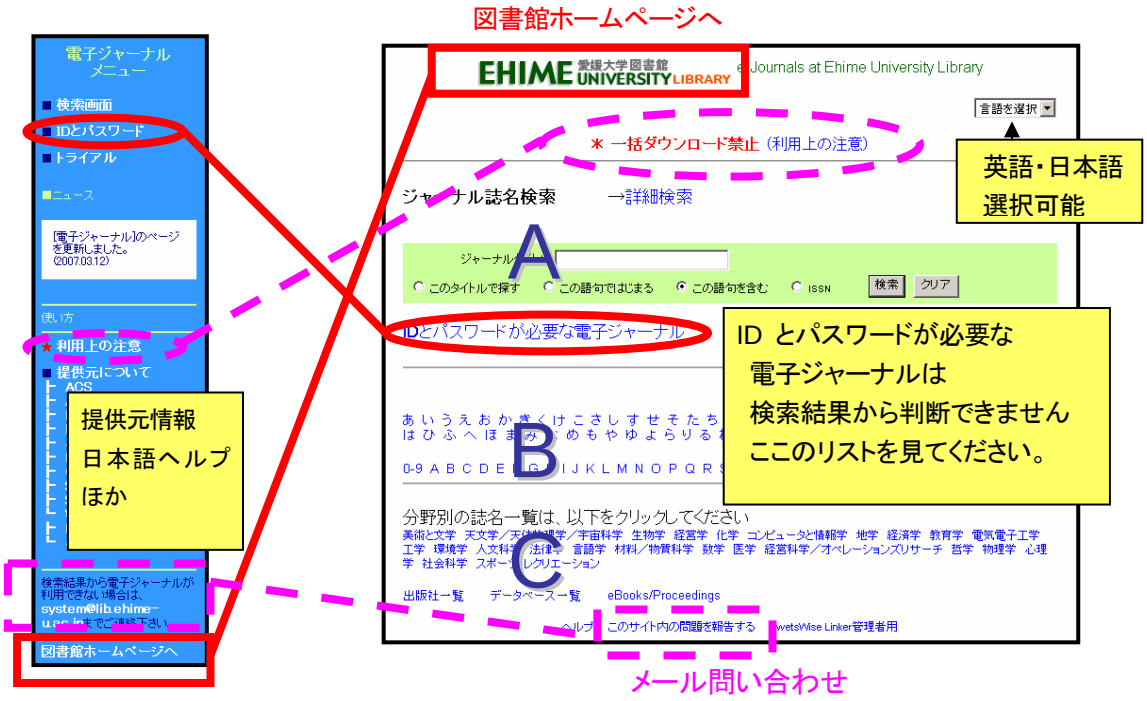
学術情報リテラシーシリーズ（第６回）
電子ジャーナル・コンテンツサービス

電子ジャーナル検索画面は平成 19 年 3 月 12 日から、コンテンツサービスは平成 19 年 2 月 1 日から、システムが新しくなりました。

電子ジャーナル検索画面

電子ジャーナルは**パソコンで雑誌論文が読める**ものです。冊子体で発行される前の論文が公開されている場合もあります。
一括ダウンロード厳禁！違反すると、愛媛大学全体でアクセスができなくなります。
別途 ID/パスワードの入力が必要なジャーナルもあるので、〇部分を確認してください。

〈左メニュー〉　　〈検索画面〉

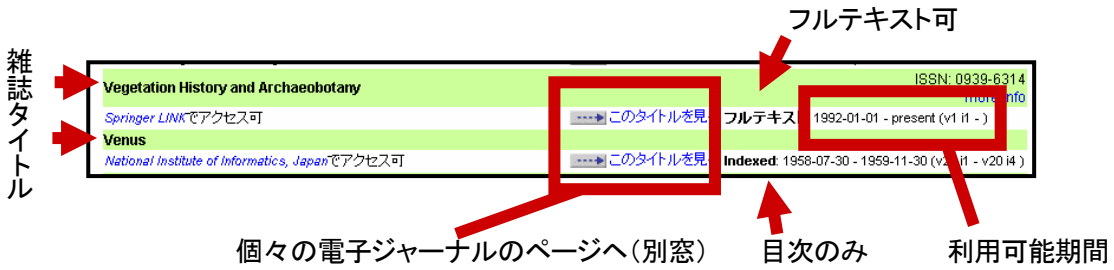


A　雑誌タイトルの語句や ISSN（国際標準逐次刊行物番号）で検索
　「この語句ではじまる」最初の語句の途中までででも検索可能
　「このタイトルで探す」「この語句を含む」「ISSN」は語句ををきちんと入力する必要あり
　「タイトル省略形」正式な省略形から検索可能（前方一致検索ではない）

B　雑誌タイトル頭文字から一覧表示

C　雑誌の分野で一覧表示、2 階層（一次区分―二次区分）になっている

〈検索結果画面〉



コンテンツサービス：SwetsWise

SwetsWise について

外国雑誌 17,000 タイトル以上（全分野）を収録しているコンテンツ（雑誌目次）検索システムです。目次情報は、ほぼ 1997 年以降のデータが収録されていますが、雑誌によって異なります。文献検索のみであれば、未登録でも利用できます。

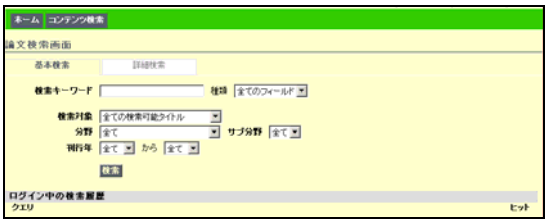
利用登録を行うと、さらに下記のサービスが利用できます。

●コンテンツサービス
希望する雑誌の最新目次情報をメール配信で受け取る機能

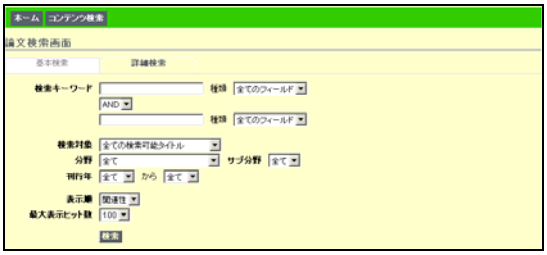
●アラートサービス
キーワードを予め登録して、それに関連した最新論文情報をメール配信で受け取る機能

■登録方法
利用登録を希望される場合は、以下の宛先までメールでお申し込みください。
●件名
「SwetsWise コンテンツサービス申込み」
または
「SwetsWise アラートサービス申込み」
両方の場合は
「SwetsWise コンテンツサービス＆アラートサービス申込み」
●本文に下記(1)～(3)を明記
(1)氏名
(2)所属（学部/学科等）
(3)身分（教員、院生、学生、職員等）
図書館事務課 学術情報チーム:
system@lib.ehime-u.ac.jp
（内線:8841）

<基本検索画面>



<詳細検索画面>



■検索 TIPS

	検索例	説明	結果例
記号を何も使わない場合	meet	複数形や現在進行形も一緒に検索	meet meets meeting
完全一致 ”●●●”	"meet"	単語「meet」に限定したい場合	meet のみ
大文字小文字指定 <CASE>	<CASE> UN	大文字限定	UN (un はヒットしない)
トランケーション *（アスタリスク）	zoo* （少なくとも 3 文字は入力）	[zoo]で始まる語	zoo zoom zoopl-ankton
ワイルドカード ?（クェスチョン）	fl??ss	[fl] で始まり[2 文字]何かが続き最後 [ss] で終わる語	flauss fliess
近接語 <NEAR>	world<NEAR>peace	単語が近いものを検索	
<NEAR/N>	world<NEAR/3>peace	N に数字を入れ、その数字単語内に近接する場合のみ検索	

演算子 AND	sed AND awk	[sed]と[awk]を含む
OR	sed OR awk	[sed]または[awk]を含む
NOT	sed NOT awk	[sed]を含み[awk]を含まない

著者名
1. (smith john) OR (smith j)
2. ("smith john") OR ("smith j").

<検索結果画面>

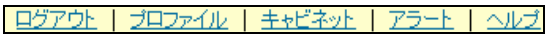
アイコンをクリック

1)このタイトルを見る→電子ジャーナルの目次ページへ
2)論文を見る→論文個々のページへ
3)愛媛大学図書館 OPAC→OPAC検索結果
4)文献の取り寄せ(ILL)→情報がILL申込ページに転写される（*図書館WEBサービス登録者のみ）
5)Google Scholar→著者や論文タイトルでGoogle Scholar検索
6)Bibliographic Software (Endnote, Procite)に書誌情報をエクスポートする／Refworksに書誌情報をエクスポートする→各文献情報管理ソフトの形式にデータを出力
1)2)の注意：該当の電子ジャーナルを本学で契約していない場合は、右上部の表示になる。

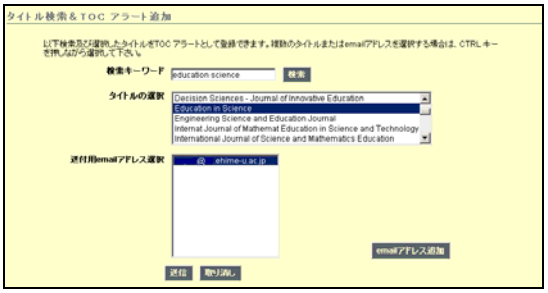
1'-1)このタイトルを見る
1'-2)ジャーナルの出版社
1'-3)類似する分野のジャーナル

<以下のアラートの登録は登録者がログインした状態で行います。>

■コンテンツアラート登録方法
（コンテンツサービス）
登録可能な雑誌の上限：10
①画面上部のアラートをクリック

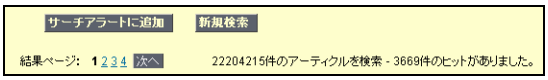


②目次情報を受信したい雑誌を検索しリストから選択。
メールアドレスも選択後、下部の「送信」ボタンをクリック

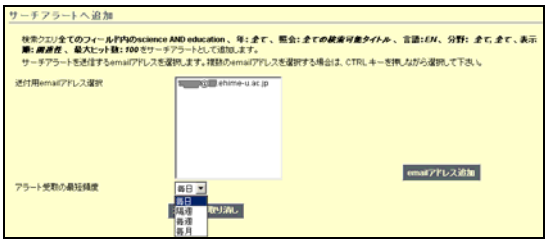


■　サーチアラート登録方法
（アラートサービス）
登録可能な検索式の上限：3
①<基本検索画面><詳細検索画面>検索する

②検索結果上部の「サーチアラートに追加」をクリック



③送信するメールアドレスと、受信頻度を選択し、下部の「送信」ボタンをクリック



理科年表プレミアムの利用

『理科年表プレミアム』は、「理科年表」の大正１４年の創刊から最新年度版（１９２５－２００５）までの過去８０年分の膨大なデータをデータベース化したものです。暦部、天文部、気象部、地学部、生物部、環境部の７部門のジャンルから約 15,000 項目におよぶ図表データに簡単にアクセスすることができます。また、すべての表データが CSV 形式でダウンロードもできますので、図書館ホームページからご利用ください。

ACS ジャーナルの導入

城北地区及び樽味地区で，理学部・工学部・農学部および総合科学研究支援センターの経費負担により，２００７年１月から，ACS（American Chemical Society）の下記の電子ジャーナルが利用できます。「図書館ホームページ」の「電子ジャーナル」からご利用ください。なお、重信地区からは利用できません。

利用できるタイトル
1. Accounts of Chemical Research
2. Analytical Chemistry
3. Biochemistry
4. Bioconjugate Chemistry
5. Biotechnology Progress
6. Chemical Research in Toxicology
7. Chemical Reviews
8. Chemistry of Materials
9. Energy and Fuels
10. Environmental Science and Technology
11. Industrial & Engineering Chemistry Research
12. Inorganic Chemistry
13. Journal of Agricultural and Food Chemistry
14. Journal of the American Chemical Society
15. Journal of Chemical and Engineering Data
16. Journal of Chemical Information and Modelling
17. Journal of Medicinal Chemistry
18. Journal of Natural Products
19. Journal of Organic Chemistry
20. Journal of Physical Chemistry A～C
21. Langmuir
22. Macromolecules
23. Organic Process Research and Development
24. Organometallics

新刊パッケージ
1. Biomacromolecules
2. Crystal Growth and Design
3. Journal of Chemical Theory & Computation (2005 年新刊)
4. Journal of Combinatorial Chemistry
5. Journal of Proteome Research
6. Molecular Pharmaceutics
7. Nano Letters
8. Organic Letters

SciFinder Scholar の導入

SciFinder Scholar については、平成 18 年度第 2 回図書館委員会（平成 18 年 7 月 31 日開催）で、1 年目が全学共通経費、2 年目は 35 パーセントの学部負担（受益者負担を前提としている）で導入するという案を担当理事に要望することが了承されたことにより、担当理事に要望しました。その結果、1 年目として平成 18 年度においては、3 ヶ月分の予算措置（共通経費）が講じられたので、平成 18 年 12 月から平成 19 年 2 月までの 3 ヶ月間、**SciFinder Scholar** を導入しました。

なお、平成 19 年度からも利用できます。

SciFinder Scholar は、あらゆる分野における幅広い研究へすばやく簡単にアクセスできる大学向けの情報検索サービスです。

- CAS のデータベースは、科学者が作成しています。
- 9, 500 誌以上の現在発行されている雑誌に収録されている文献および 50 以上の特許発行機関から発行される特許情報を調査できます。
- 1900 年以降に発行された 100 年以上にわたる文献情報
- 発行されたばかりの最先端の科学文献情報および発行後 2 日以内の特許情報
- 広範囲な化学分野、生化学、生物学、薬理学、医学、その関連分野を含む生命科学
- 世界最大の有機物質および無機物質情報のデータベース

SciFinder Scholar では、以下の情報や機能を使って、研究プロセスの効率化が図れます。大学教職員や学生は以下の情報や機能が利用できます。

- 科学者が作成した索引付きの内容
- 直感的な操作方法
- 100 年以上におよぶ科学情報へのスピーディなアクセスによる時間の節約
- いかにして新しい発見がなされ、またいかにしてこれらが従来の科学分野での原理を変えてきたかという、科学の原理の検索
- 幅広い関連情報へのリンク機能
- 構造検索が可能な 2, 600 万以上の化学物質情報

SciFinder Scholar は、世界中の企業で使用されている SciFinder の大学版です。

電子ジャーナルに関するアンケートまとめ

図書館では 2006 年 12 月 1 日より 15 日の間にかけ、本学全教職員及び学生に向けて電子ジャーナルに関するアンケートを実施しました。2 週間ほどの短い期間ではありましたが、311 名から回答がありましたのでその集計結果を要約し報告します。

・アンケートの目的：　平成 20 年度以降の電子ジャーナル整備に関し、基本方針を策定するための参考資料とするため。

・対象者及び回答者数：　本学教職員及び院生・学生：10,686 名　　回答者数：311 名

・調査期間：平成 18 年 12 月 1 日～平成 18 年 12 月 15 日

A.基本的調査事項

1）所属別回答数（人）

法文学部	教育学部	理学部	医学部及び病院	工学部	農学部	研究施設	附属学校	その他	合計
18	22	64	66	60	41	24	0	16	311

2）身分別回答数（人）

理事・教授	助教授	講師	助手	他の職員	大学院生	学部学生	研究生等	その他	合計
66	88	21	42	33	45	14	1	1	311

内教員 217 人

3）電子ジャーナルの利用頻度（人）

毎日利用	週に数回	月に数回	必要な時	利用しない	合計
68	106	46	61	30	311

回答者 311 人のうち教員は 217 人で全教員（843 人）の約 26%から回答があった。

また、回答した 311 人中 279 人は電子ジャーナルの利用実績があり、その中でも 80%近くは継続的な利用を行っている。

B.電子ジャーナルの必要性

1）今後の整備方針について

		回答人数	率
①電子ジャーナル導入を積極的に行うべき	・・・・・・	209 人	67.2%
②4 大出版社に限定する	・・・・・・	28 人	9.0%
③一億円程度でシーリングを掛ける	・・・・・・	38 人	12.2%
④必要最小限にしたほうがいい	・・・・・・	25 人	8.0%
⑤大学として導入する必要はない	・・・・・・	0 人	0.0%
無回答	・・・・・・	11 人	3.5%

整備方針については、約 70%が電子ジャーナル導入を積極的に行うべきという考えであった。

2)導入を希望する電子ジャーナル

順位	タイトル又は出版社名等	人数	比率	必要とする部局	2008年概算価格（万円）
* ①	Elsevier ScienceDirect Freedom Collection	153	73.2	全部局	6,554
* ②	Springer（Springer-LINK）	127	60.8	全部局	2,066
* ③	Wiley（InterScience）	98	46.9	全部局	936
④	Nature	90	43.1	法文学部を除く部局	101
⑤	Science	84	40.2	法文学部を除く部局	55
* ⑥	Blackwell（Synergy）	81	38.8	全部局	1,320
* ⑥	Scopus（雑誌論文検索データベース）	81	38.8	全部局	600
⑧	ACS=American Chemical Society	66	31.6	法文学部を除く部局	163
9	Elsevier ScienceDirect Complete Collection	65	31.1	全部局	6,132
⑩	SciFinder Scholar（化学系データベース）	59	28.2	全部局	670
⑩	Oxford University Press	59	28.2	全部局	160
⑫	PNAS（Proceedings of the NationalAcademy of Science of the USA）	46	22.0	法文・教育を除く部局	41
⑬	Journal of Biological Chemistry	44	21.1	法文・教育を除く部局	31
* ⑭	JSTOR（人社系バックファイル）	43	20.6	教育学部を除く部局	50

注１）2008 年概算価格は、2007 年予定価格の 5%増しとして算出した
注２）ACS については、全学での参考見積がないため、医学部キャンパスを除いた概算とした
注３）順位の○付数字は、現在の整備計画及び部局負担にて提供中（予定）である
注４）順位番号の前の＊印は、現在の整備計画対象を示す

整備方針で一番多くの支持を得た積極的に行うべきという 209 人（67.2%）が選んだ希望する電子ジャーナルから支持率（20%以上）の高い順に一覧とした。

選ばれた上位 6 位のうち Nature 及び Science を除く 5 タイトルは、現在の整備方針にて導入した電子ジャーナル及びデータベースとなっており、いずれも 30%以上の方及び全学部からの支持を得ている。

3) 4 大出版社に限定した場合の経費負担について

	回答人数	率
①値上げ分は現在の比率（共通経費 65%、学部負担 35%）で負担する	14 人	31.1%
②値上げ分は大学共通経費を増加する ……	27 人	60.0%
③値上げ分は学部経費を増加する ……	4 人	8.9%
④その他（具体的な案） ……	0 人	0.0%

４大出版社に限定した場合の経費負担については、値上げ分を大学共通経費で負担との回答が 60%と多く、次いで値上げ分を現在の比率で負担するが 31%となっている。

4)一億円程度でシーリングを掛ける場合、どれを優先するか

	回答人数	率
①利用実績の多いものなどを優先する ……	23 人	57.5%
②４大出版社等から選択する ……	4 人	10.0%
③一億円を越える部分は、大学図書館間での ILL を利用する ・・・	13 人	32.5%
④その他の対応策や意見 ……	0 人	0.0%

シーリングを掛けた場合には、利用実績の多いものを優先するが約 60%と多く、次いで越える部分については大学図書館間の複写サービス（ILL）を利用するが多かった。

なお、利用実績で優先する順位は利用件数、4 大出版社からの選択では JSTOR を除く出版社を各 5~10 人が選択し、必要最小限に限定する場合においても 4 つの選択肢のいずれも 4~8 人の選択であった。

C.共通経費化等について

1）共通経費と学部負担の割合について

		回答人数	率
①現状（共通経費 65%、学部負担 35%）の割合でよい	・・・・・・	148 人	47.6%
②全学共通経費化したほうがよい	・・・・・・	104 人	33.4%
③学部負担分を増加し、各学部一律に負担を増やす	・・・・・・	5 人	1.6%
④学部負担分を増加し、利用している部局の配分をより一層多くする	・・・・・・	32 人	10.3%
⑤大学共通経費ではなく、部局または利用するものが全額負担する	・・・・・・	14 人	4.5%
無回答	・・・・・・	8 人	2.6%

経費の負担割合については、現状の割合もしくは全学共通経費化という回答が多く、中でも半数近くの方は現状の割合を選択している。

2）研究費が削減される中で、電子ジャーナルの部局負担が増える場合について

		回答人数	率
①電子ジャーナルは必要だから、部局負担が増加してもよい	・・・・・・	109 人	35.1%
②年 5%程度の部局負担が増えてもしかたがない	・・・・・・	108 人	34.7%
③負担が増えるなら、電子ジャーナル数が減少してもしかたがない	・・・・・・	63 人	20.3%
④負担が増えるなら、電子ジャーナルはいらない	・・・・・・	8 人	2.6%
無回答	・・・・・・	23 人	7.4%

部局経費の負担増については、約 70%が電子ジャーナル整備に伴う負担増を容認するものの、23%は電子ジャーナル数の減少を容認している。

D.図書館に対する意見

アンケート全般及び図書館に対する意見には 59 件寄せられ、内 28 件は電子ジャーナル化を進めるべきという内容となっており、内 6 件は必要経費の全額を共通経費化すべきというものであった。

シーリングに関する意見では、額から考えるより、どのジャーナルが本学に必要かを精査し、結果として 1 億円（仮に）を越えてもいいのではないかという意見がある。

利用できるタイトルが自然科学系に偏っているという意見もあり、現在の利用の実態や経費負担を考慮すれば、人文社会系パッケージ（JSTOR や Project MUSE 等）の導入も資料選択の視野に入れる必要がある。

必要な電子ジャーナルが利用できない場合の対応としては、PPV*1（Pay Per View）や ILL（図書館間の文献複写サービス）の利用があげられ、PPV については利用料金の支払い手段の整備、ILL についてはもっと広報を行うべきとの意見が寄せられている。

*1：PPV（Pay Per View）とはデジタルコンテンツをネットワークで提供する場合に、データをダウンロード（利用）した回数に応じて課金する方式のことで、現在は 1 件当たり 25$～35$の費用がかかる。　また、支払いにはクレジットカードが必要となっている。

資料．アンケート集計結果

電子ジャーナルの利用方法（問５）に関するその他の意見

希望する電子ジャーナル（問８）に関するその他の資料

電子ジャーナル整備を必要最小限にした場合の対応策（問１３）に関するその他の意見
図書館に対する希望・意見等（問１６）に関する意見等

問 5）電子ジャーナルの利用方法について

1　internet
2　数学教室で購読しているアメリカ数学会の MathSciNet（購読料 100 万円程度）というデータベースの検索結果からのリンクを利用する。
3　図書館の Contents Alert を利用し，必要な物を図書館からブラウズ.
4　JDream 利用
5　論文アーカイバからのリンクをたどる
6　論文の引用文献から上記方法を用いて利用している。
7　参考文献の書誌情報のリンク経由
8　高エネルギー文献データベース spijres から利用する
9　Google Scholar
10 アメリカ数学会の MathSciNet を利用する。
11 言語学関連のメーリングリストから送信される主要雑誌の最新号に関するメールから辿る場合もある。(回答者は言語研究に関わる者である。)
12 google
13 論文の refernces から
14 Mail Allart Services
15 論文の引用文献から電子ジャーナルに入ることもよくある。
16 Google Scholar をつかう
17 Google Scholar を利用
18 個人で契約している電子ジャーナルを使用している。

問 8）導入を希望する電子ジャーナル及びデータベース

1　allophane
2　SIAM, 世界の主要大学で運営している歴史のある有名な国際学術誌（それぞれは比較的安価）
3　Cell
4　Project Euclid SIAM Cambridge Journals Online
5　Nature でも現在はいろいろなタイトル物が出ており、そのなかでも Nature Cell Biology、Nature Structure、Nature Biotechnology、Nature Method は必須である。毎回 急いでいるときに一論文あたり 3 千円を払うのはこたえます。
6　Diseases of Aquatic Organisms
7　Geology, Tectonics
8　marine ecology progress series aquatic microbial ecology
9　J-STAGE
10 Transplantation
11 Quarterly Journal of Economics (MIT Press)
12 Proc. Roy. Soc. Edinburgh (A)
13 Theoretical Linguistics, The Linguistic Review, Probus (以上, Walter de Gruyter) Linguistic Inquiry (MIT Press) Journal of Linguistics (Cambridge University Press)
14 日経テレコン 21
15 Evolution
16 JJAP, JPSJ, PTP (日本物理学会、応用物理学会) CSD (ケンブリッジ結晶構造データ

ベース)、ICSD（無機結晶構造データベース)、CRYSTMET 金属結晶構造データベース）など

17 Cell Press
18 diamond and related materials appl. Phys. Lett.
19 Nature immunology Nature cell biology
20 EBSCO
21 CNKI
22 Lippincott Williams & Wilkins (LWW online)
23 Organic Biomolecular Chemistry
24 Lippincott Williams & Wilkins
25 Project MUSE http://muse.jhu.edu/journals/index.html
26 Project MUSE の導入を希望します。人文、社会科学分野の学術文献データベースとしては非常に重要なもので、日本では北大、岡山、早稲田他で導入されており、東大も確か試験運用をやっていたことがあるはずです。

問 13）電子ジャーナル整備を必要最小限にする場合の対応策

1　数学のような分野における雑誌の比重と他の１０年もすれば引用もされないような分野では重要度が違う。それも込めて大学全体で購入図書を決めそのための経費を設けるべきである。受益者負担などと体のいい文句で数学教室の予算が図書費だけでパンクするような事態は避けることは言うまでもない。大学の見識を疑われるような事態が起こらないようにすべきである。出版社の言いなりな状態にもメスを入れる必要があるだろう。

・必要性について

回答概要	回答番号	回答数
電子ジャーナルは絶対必要である	3,7,11,12,13,15,16,18,20,22,23,29,33,36,42,43,46,53,54	19
必要だが予算との兼ね合いが必要だと思う	26,27,30,58	4
電子ジャーナルは有用である	1,25,40	3
現在の規模を縮小するべきではない	41,52	2
自分の分野に電子ジャーナルは必要ない	37	1

・契約について

回答概要	回答番号	回答数
電子ジャーナルは必要な雑誌を厳選して契約すべき	27,29,30,31,41,44,48,58	8
契約外の電子ジャーナルも論文ごとに公費等で購入できるよう整備して欲しい	4,26	2
scopas で検索しても使えない文献をダウンロードできるようにして欲しい	55,56	2
電子ジャーナルを減らしてもデータベース契約は残して欲しい	26	1

・予算について

回答概要	回答番号	回答数
共通経費	12,26,29,47,57	5
部局負担増は認められない	17,23	2
学外と連携して購入する	8,50	2
部局負担	2	1
ベース的負担(50%)に部局負担を	2	1
利用者個人負担	51	1

・導入希望のデータベース/電子ジャーナル

回答概要	回答番号	回答数
Web of Science	6,10	2
日経オンライン等、国内の電子ジャーナルも契約して欲しい	5	1
理系雑誌にかたよりすぎであり、CNKI の雑誌も導入すべき	45	1
LWW Journals	38	1

・データベースの使い勝手

回答概要	回答番号	回答数
SCOPUS が使いにくい	19	1

・図書館サービスへの意見

回答概要	回答番号	回答数
SDI のリンクを電子ジャーナル本文にリンクさせて欲しい	24	1
最近 ILL で注文した論文が届くのが遅い	28	1
ILL 到着、図書整備終了のメールが届かないことが多い	52	1

・その他

回答概要	回答番号	回答数
冊子体(雑誌)の購入を減らす（なくす）べき	35,44,53	3
アンケートで回答するための資料が不十分である	29,32,34	3
電子ジャーナルの利用法など広報が必要	1	1
予算削減のために ILL の広報をもっとしたほうがよい	4	1
図書を充実させて欲しい	14	1
新着雑誌を科研費で払えるなど弾力的な予算執行を	14	1

問 16）その他のご意見

1　私が文系学部所属なせいか、電子ジャーナルを使う機会はあまり多くないのですが、地域調査を行う際に「聞蔵」を使うとその地域の情報がよくわかり、とても有用であると感じました。 もっと図書館が基礎セミナーなどの時間に、電子ジャーナルの使い方などを教えることで、全学的な電子ジャーナルへの理解が得られるのではないでしょうか。

2　図書館の基本的設備としてのベース的負担（５０％）に，「利用者負担」があっても良いと思う。図書を利用するあるいは和誌中心の場合は講座負担になり，電子ジャーナルの場合は共通経費というのは公平感に欠ける。利用頻度，利用回数などに応じて個人，講座，学

部の利用者負担の率を高くするべきだと思う。

3　研究を重要と考える視点に立てば、電子ジャーナルは大学という機関にとって備えるべき必需品です。(研究面を軽視するならばこの限りではありませんが、やがては優れた教員が集まらなくなり、衰退するのでは」ないでしょうか。）　また、世界の主要大学で運営している歴史のある有名な国際学術誌はこのままでいくと電子ジャーナルの学部負担（35 パーセント）のためにすべて購読できなくなります。

4　上で挙げられたデメリットの例で「一括パッケージの契約なので、専門外の関係ないタイトルも多く含まれている。」というのがありましたが、データベース検索により見つかった論文を、その一部のみ個別に校費で買えるようにすることは出来ませんでしょうか。また同時に、予算には制限がありますので、より ILL に関する広報をしてもらって、冊子体購入の費用を節約することも必要だと思います。

5　日経オンライン等国内のジャーナルの導入も検討していただきたい

6　Web of Science の導入を希望します.

7　私の赴任してきたときから比べると、また、2 年前に比べても従来の出版物、電子ジャーナルを問わず、利用できるジャーナルのタイトルが飛躍的に増加したことは、皆様の努力の賜物だと感謝しております。財政状況が厳しいのもわかりますが、愛媛大学が「最先端」研究活動の推進をうたっている以上、電子ジャーナルは必要不可欠であり、後ろ向きになることだけはぜひ回避していただきたいものです。

8　県内利用者（医師会、病院、民間研究所など）の参加（利用料を負担してもらい，配信あるいは図書での利用を可能とする）により、大学の負担を減らす可能性は無いでしょうか？

9　電子ジャーナルだけではなく、従来の紙媒体の雑誌の購入費用もバランスにかけてはいかがでしょうか？

10　SCOPUS ではなく，Web of Science が利用できるようにしてもらいたい。

11　電子化はまだ途上であろうから、今後もこれが一段落するまで出版社の戦略として価格が高騰するだろうが、お付き合いもやむを得ないと思います。電子ジャーナルを直ぐに閲覧できることは、もはや不可欠の「商売道具」です。

12　国立大学の経費が年々削られてゆくなか、教育及び研究の基本となる海外論文へのアクセスは是非確保するべきで、あまり有効とも思えない支出には見直しするべきだが、こういう経費は削減するべきではない。

13　現在のような情報化社会において、地方大学で研究を行うには、電子ジャーナルやデータベースの導入は必要不可欠な基盤整備と考えるべきである。様々な面で不利であるにもかかわらず、中央の大学と競って競争的資金を導入することが求められているのであるから、せめて、インターネットで入手可能な情報や論文は、同じように整っていなければ、スタート地点にも立つことができない。 最近、電子ジャーナルやデータベースの導入を巡って、図書館や図書委員の方々のご意見を伺う機会が合ったが、大学は教育と同時に研究も極めて重要であり、競争的資金の導入が強く求められていること、さらに、特許の取得も理系の学部には強く求められていることの認識が希薄なのではないかと感じられた。競争的資金や特許の取得には電子ジャーナルやデータベースが必要不可欠であること、そのために必要なインフラは最低限整備すべきであると、認識を改めて頂きたい。一律に学部間の公平性を持ち出すのではなく、もっと大きな視点に立って、考えていただきたいと思う。

14　電子ジャーナルばかりにお金を取られて、その他の冊子体の普通の本（ジャーナルではない単行本）の購入が減っているのではないか。こちらの方は後から必要になっても２，３年もすれば絶版になるのだから、こちらの図書の充実も図っていかなければならない。科研費による新着雑誌代の支払いを可

能にするとか、少ない予算の弾力的な執行を可能とするような方法を講ずるべきである（雑誌につては現在では、バックアップのみ可能であることは百も承知、そんかことはほとんど無意味)。図書館は大学の顔である。これからもっと地域貢献もしていかなくてはならないことなどを踏まえて、もっともっと充実したものにしてゆかなければ世間にも笑われるし、受験生の減少にも結びつく大切な問題である。

15 学術論文の整備に関する姿勢は、愛媛大学としての学問に対する見識が問われていると思います．ここに資本の投下をせずに大学ですとは胸を張って言えないと思います.

16 電子ジャーナルは、理工系の学部にとって 必要不可欠のものになってしまいました（不本意ですが)。 経費は大学全体で負担すべきものだと思います。

17 現状でも他大学と比較すると学部負担が多いのに、学部負担増を前提としている方針はおかしい。

18 大学は研究成果を必ず論文にしなければ意味のない所であるということを考えれば、電子ジャーナルを充実させるのは必須であり、充実していないような大学では研究の質や学生の士気も落ちるだろう。事実、旧帝大ではかなりの整備がなされている。経費がかかるというのであれば、研究成果を論文化していないような研究室の人件費を削るべきであろう。

19 scopus が非常に使いにくいです。被引用検索などができないような気がするんですが。ISI の検索が良いなぁ。

20 電子ジャーナルの充実により、これまでの個人負担分が減ることを実感しています。総合的に見れば経費は節約でき、また必要な情報を必要なときに見られることから、とくにこの様な資源の貧弱な地方大学では電子ジャーナル拡充の必要性は非常に高いと思います。

21 問 15 に関して、該当する項目がないので無回答としています

22 インターネットが普及した現在において電子ジャーナルを否定あるいは不要と考える人がいるのは信じられない。既存の紙媒体の資料のみで研究が遂行するというのであれば、そんな黴臭い"閉じた"研究はやる意味がないのではなかろうか。

23 ・必要なものを減らされると、研究室負担あるいは学科負担になることがある。これは望ましいことではなく、何らかの方策が必要。 ・図書、特に、学術雑誌は共通性のある研究基盤なので、その(電子ジャーナルが望ましい)充実を主要目標にしてほしい。

24 現在の SDI サービスでのリンクをダイレクトに電子ジャーナル本文にリンクできないでしょうか。現在は、タイトルなどを知ってから、別に図書の電子ジャーナルサイトを開いて、該当のものがあるかどうかを確認して、直接ダウンロードして利用、無い場合はコピーサービスをお願いする段取りの様です。メールはクリックするとすぐに図書の貸借利用申請になっていて、その前に所蔵の有無、電子ジャーナル利用の可否が、別に調べなくてはなりませんので、少し、面倒臭いです。

25 今後、雑誌の購入よりも電子ジャーナルの契約のほうが、便利で使いやすいと思います。ただ、資産として残らないのが残念ですが。

26 研究テーマや研究の手法は各人で工夫して経費をかけずにいい研究をすることも出来ますが、「情報の入手」に関してはお金をかけなければ無理な状況になりつつあります。Scopus や SciFinder が導入されたことで、学部生、大学院生ともに英語論文、研究の最新情報へのアクセスを積極的に行なうようになっており、表に出てこない部分で相当の教育効果も生んでいます。大学の使命は社会への情報の発信です。教育も、学生に情報をインプットして社会に送り出す以上、情報の発信に他なりません。であるならば、情報入手は大学が生き残るために最優先し、最大限の経費をかけるべきでしょう。もし、受益者負担を声高に叫ぶ学部があるならば、蔵書も分野わけして、購入

経費と図書館の運営維持費もそれに比例配分してを受益者負担にしないと公平性が保てません。そこまでするというのであれば、受益者負担も検討するに値するでしょう。しかし、おそらくは、「図書館は公共のものなので全体経費で運営するべきであり、受益者負担はふさわしくない」という反論を受けるでしょう。であるならば、電子ジャーナルは図書館の一部ではないのでしょうか?媒体が変わっただけでなぜ受益者負担となるのか?論理的な説明がない限りは、受益者負担を受け入れるわけにはいきません。 「情報の入手」の重要性を鑑みれば、ジャーナルの契約を減らしても、検索エンジンは最後まで契約していただきたい。情報入手の手段だけは何があっても確保していただかないと、本当に世界から孤立してしまいます。Scopus が導入されてようやく研究のための情報、論文執筆のための情報が集められるようになりました。検索エンジンは最も重要な図書館のツールです。 もう一点、契約外の電子ジャーナルの論文の研究費での購入の手段を整備してください。例えば、講座にクレジットカードの契約を認める、もしくは図書館に代理購入を請求できる、などの手段を真剣に検討してください。

27 問 8)の ACS: American Chemical Society のリンクが誤りである。 電子ジャーナルの価格上昇は予算規模の小さい大学では許容しがたい。 しかし、電子ジャーナル無しでは研究が全くできない状況があるので各研究室で使用頻度が高いジャーナルを提案し、厳選した上で購読すべきだと思う。資料を見ると、全く読まれていないジャーナルが多々ある。

28 最近、文献複写サービスで注文した論文が手元に届くまでの時間がかかるようになりました。

29 電子ジャーナルにせよ冊子体にせよ、図書の充実は大学として必然のことです。電子ジャーナルのメリットは冊子体に比べて相当多いので、電子Ｊで充実を図るのがいいと思います。が、今回のアンケートのＢに応えるにしては、電子Ｊ利用状況がはっきり分かりませんし（2005 年の利用回数では、医学・生化学、及び化学全般とりわけ有機系の雑誌に利用が多い傾向にある）、雑誌購読の現状への学内の反応ぶりも分かりませんので、応えるのを控えることにしました。我々の分野（有機化学系）としては今回 SciFinder も利用できるようになり、環境は相当整った状況にあります。自己中でジャーナルの選定をすべきでないと思い、Ｂへの回答を控えました。 また、１億がジャーナルにかけるリミットとかどうかというような額から考えるより、どのようなジャーナルが購読できれば本学として相応しいかの精査して、結果として１億を越えてもいいのではないでしょうか。当然無制限というわけにはいかないでしょうが、丸投げの様なケースや無駄な投資を再考していただけたら、図書費としてもっと有効に使えるだけの額が捻出されてくると思っています。問１５）については、部局負担が前提となる質問のように思えますが、私は、リセットして全学共通一元化で図書費を取り扱って欲しいと思います。受益者負担という考えは、大学予算の多くが研究費として分配されていた時のことであって、現状にそぐわないものと思います。大学として必要なＪを選定・管理すればいいのだと思います。よろしくご吟味ください。

30 大学院生なので費用のことはよくわかりませんが，電子ジャーナルはよく利用するので無くなることは避けて欲しく思います。また大学の経済状況も厳しいことから，あまり使われていない電子ジャーナルは文献複写サービスで補い，必要な研究室や研究者がそのジャーナルに対して経費を払う方式でもよいのではないかと思いました。

31 ４大出版社といわれても、どのジャーナルが入っているのかがよくわからない。 もし、雑誌をしぼるなら、インパクトファクターとか、利用者がどの雑

誌をよく利用しているのかを調べてから、必要な雑誌を選んだらいいのでは。

32 電子ジャーナルの契約価格体系のようなものが理解できていないため、適切な回答が難しいと感じました。　電子ジャーナルをよく利用する人、部局ほど、このアンケートに積極的に回答し、またその一方で共通負担にしようと回答する傾向が想定されるので、経費負担に関する回答の扱いには注意が必要と思われます。

33 旧帝大系をはじめとする大きな大学との競争力を維持し、地方大学が今後、研究面で生き残るためには、いかに早く、正確に多くの最新情報を集められることが不可欠です。優秀な研究者（教員・ポスドク等）は、より研究環境の整ったところへ集中していく現状では、情報の重要性は増えるばかりです。設備もないし、最新の研究の動向が分からないところからは人材の流出は避けられません。 また、大学院教育においても、理系の場合は研究と密接にかかわっており、より研究のできる他大学院への流出最近の愛大でも見られる現象であり、これを防ぐためには愛大の中での進学率を上げることが重要であり、電子ジャーナルやデータベースの充実が必要です。これらは、これからの大学にとって最低限必要な教育、および研究基盤設備であると考えるべきです。

34 年間のダウンロード数 x 単価をまず試算すべき。個別購入のほうがやすいかも？学会会員であればJBCなどはfreeでダウンロードできる。

35 電子ジャーナル導入に伴い、印刷物の購買を縮小するという条件が必要

36 オンラインで文献を入手できるメリットは非常に大きなものです(学外では文献の入手が大変ですから)。コストとのかねあいは当然ありますが、電子ジャーナルはできるだけ充実させたほうが良いと思います。

37 私たちの分野は大手出版社からの雑誌は少なく、結局、小出版社から個別に購入する以外にない。電子化されてもメリットは全く感じられない。

38 LWW Journals の電子ジャーナル導入を検討ください。

39 特にありません。

40 ペーパーレス化が叫ばれている今日、電子ジャーナルを主体にして、紙の媒体は必要最小限にとどめ、図書館とメディアセンターの壁を取り払うなど、工夫が必要と思われる。私自身、ジャーナル類は、スキャナーで読み込める分は、極力読み込んで、後は資源回収に出し、占有スペース削減に努めているが、必要な時に、紙の媒体以上に簡単に見つけ出せて、便利である。

41 現在は,「使いたいが欲しいジャーナルがない」ことが多いというのが現状です．しかし，それに関しては，マイナーなジャーナルの場合は致し方ないと思います． 電子ジャーナル化が進む中，大学としてある程度の規模を常時使用可能な状態でなければ，大学としての質が問われる可能性もあり，これ以上減らすということには賛成できない．むしろ，利用する側をもっと増やすべきで，われわれの側にもっと努力があってしかるべき． しかし，アンケートに答えたように，利用されていないジャーナルを確保し続けるには疑問があり，なるべく多くの利用者があるものを優先するのは当然だと思う． あとは，こちらからの要望がよりしやすい環境を作っていただけるとありがたい．すでにあるのであれば，私の不勉強ですので，お許しいただきたい．

42 愛媛大学が研究機関としての機能するつもりなら，電子ジャーナルやデータベースは不可欠。図書館は，主として学生のための機関として，開架時間や自習スペースの提供，専門性よりも教科書等や補完的な書物を充実させてはどうか。従来，必要とされていた研究への情報提供・管理は，ネット上の電子ジャーナルやデータベースに託した方が，時代に合っているのではないでしょうか。研究書物も，最近は専門性が高まりすぎて，共通で購入しても限られた人のみが必要とする可能性が高

いため，それらは各研究室単位で，各研究室の予算で購入してもらう方が，無駄な予算を軽減できるのではないかと思います。

43 媒体によりませんが、他の研究結果をタイムリーに参照できることは研究機関として最低限必要なことと考えます。

44 基準の閲覧数を設けた上で、利用頻度の少ない電子ジャーナルは図書館としての購入をやめて経費の圧縮を図ってほしい。 冊子体の購入は必要とする研究室が自前の経費で行い、大学図書館としては全廃しても良いのでは。

45 理系ジャーナルにかたよりすぎで不公平です。CNKI の導入を強くお願いします。

46 現状で、電子ジャーナルが閲覧制限された場合、研究の速度・質・量が劇的に悪化することは明白です。コストの問題は頭が痛いところでしょうが、大学の将来像を考えた場合に研究分野で立ち後れることは致命的なのではないでしょうか。

47 基本的な大学の設備なので部局負担を増やさず大学経費で充実させるべきだ。

48 社会科学の場合、外国雑誌の利用はは限定的であり、邦語文献が中心である。邦語文献の電子化がされているのなら良いが、あまり使わない雑誌のために多額の負担は割り切れない。

49 図書館を縮小するという小松学長及び役員会の見識を疑う。これからの図書館は、教育・研究支援の中心であり、事務室に変えてしまうというのは究極的に愚かなことである。小松氏は学長としての能力を著しく欠いており、「学生のための大学」ということにも矛盾している。無駄な工事をするより、電子ジャーナルとかと学生用図書にまわすべきだ。いずれにしても、図書館縮小という誤った結論の責任は、学長自らが厳格に取るべきである。

50 もはや、一つの大学のみで、電子ジャーナルを維持する時代は終わったにかもしれません。中四国の大学あるいは研究機関が連帯して、電子ジャーナルの整備をするとか、あるいは、地域にスポンサーを募って、整備を行う等の方法を検討する時代ではないでしょうか。

51 利用者個人負担にすべきである。

52 電子ジャーナルは研究の遂行になくてはならないものである。決して縮小するべきでないと考える。 その他の意見：依頼していた文献複写が到着した時、購入した図書の整理が終わった時のメールの知らせが、届いたり届かなかったりする。（半分以上届いていない）。

53 今後は、冊子体をなくし、全て電子ジャーナル化が望ましい

54 １．電子ジャーナルで見れなくなると図書館の方や取り寄せる人間の手間や時間が必要になると思われますが、現在そしてこれから仮に文献取り寄せ業務が数倍になる場合に、図書館は対応できるのでしょうか？（人件費の方が高くつくのでは？） ２．研究者として電子ジャーナルを利用しないことはありえないと思われますが、学生にとって違う分野のジャーナルを読める機会も重要な教育の機会を提供できるとは思いますが、それ以前の問題でせっかくの機会が生かされていないのでしょうか。

55 scopas で検索を行なえても、文献をダウンロードできるものが少ないのでダウンロードできる文献を充実させて欲しい。

56 Scopus などは Abstract しかダウンロードできないものが多く, Full text をダウンロードできるようにしてほしい。

57 電子ジャーナルは大学のレベルを表すものであるので利用する学部負担という考え方より大学全体で負担するという考えかたとすべきである。

58 どの質問項目も単純にどれか一つを選べるような簡単な質問ではないので、とりあえずの回答ということで上のように答えさせてもらいました。例えば問１５では、自分にとって（あるいは自分の学部にとって）どれだけ利用価値があるかによって答えが変わらざるを得ません。電子ジャーナルのメリッ

トはよく分かります。しかし複数のメリットを総合して考えて、なお毎年高騰していくコストを払い続けるだけの価値があるのかどうか、私自身は非常に懐疑的です。問７に対する答えもそのような条件付き（価値のある電子ジャーナルを利用できるのであれば、積極的な導入を考えてもよい）であることをお断りしておきます。

59 人文社会系の場合、電子ジャーナルの需要は理系ほど多くはないと思うので、学部ごとの費用負担の割合は利用状況も勘案して決めていただければと思います。

愛媛大学図書館将来構想案

Ⅰ．はじめに

平成１６年４月１日の法人化にあたり、愛媛大学は大学憲章を掲げ、この中で、自ら学び、考え、実践するに能力と次代を担う誇りをもつ人間性豊かな人材を社会に輩出することを愛媛大学の最大の使命としている。

図書館委員会および図書館将来計画委員会は、大学憲章の精神のもとに、「平成１３年度愛媛大学附属図書館自己点検･評価報告書」や、平成１７年度文部科学省科学技術・学術審議会報告書「学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方について」､他大学図書館の事例等を参考に、さまざまな角度から将来の愛媛大学図書館について検討し、「愛媛大学図書館将来構想案」としてまとめたものである。

Ⅱ．愛媛大学図書館将来構想基本方針

愛媛大学図書館は、愛媛大学憲章とその基本目標に基づき、本学における学習、教育及び研究の学術情報基盤としての役割を果たすとともに、学術情報を蒐集・保存し、これを利用者の学習・教育・研究のために効果的に提供することを最大の使命とする。愛媛大学図書館は、基本目標を以下に定め、基本方針とする。

１．愛媛大学図書館は、本学における学習、教育研究の発展のために必要な各種の学術情報を蒐集、保存、整理し、資料の性質に応じて可能な限り広く本学内外の利用に供する。

２．愛媛大学図書館は、紙媒体で資料収集・保存及び提供という従来からの図書館機能に加えて、電子化資料の整備を進め、電子図書館機能の整備を図る。また、学内で蓄積された各種の学術情報を電子化し国内外に向けて発信する。

３．愛媛大学図書館は、地域社会への施設の開放や関連機関との連携を積極的に推進し、地域社会の発展のために貢献する。

４．愛媛大学図書館は、中央館、医学部分館、農学部分館を置き、増大する国内外の学術情報を本学の全ての構成員が共有し、有効に活用しうるよう、専門的能力の向上及び図書館システムの高度化のために不断の努力を行う。

Ⅲ．図書館将来構想案

１．図書館の現状

現在の図書館中央館は、４０年以上前の昭和３９年（１９６４年）に建築され、老朽化・狭隘化が著しい。さらに、図書館１階を教育学生支援部が借用することで、図書館利用に甚大な障害が発生するほか、図書館管理に極めて多大な制限や問題が起こる。そのため早急に、大学の中核としての多機能・最先端の大型図書館を設置する必要がある。

２．新図書館の目的・機能

新図書館は、愛媛大学の学術情報基盤の拠点センターとして､高度情報化社会に対応し、将来充実した教育の支援や先端的研究の支援を行うための中核施設として機能します。

（１）教育支援センターとしての図書館

①開放的なスペース

学生や教員を中心とする利用者が、リラックスした環境で学習・研究ができるよう、開

放的で健康的なエントランススペースを設けます。また、利用時間拡大や受付カウンターでのワンストップサービス、わかりやすい図書館内の掲示により、一層の利便性が向上します。IC カードによる２４時間利用も検討します。

その他、閲覧用の机・椅子は、長時間利用できるよう大きさ形状に優れたものを導入します。ブースの中では、自由に音楽や映画を楽しむことができます。さらに、休憩ゾーンとして屋外及び館内に自動販売機を設置し、飲食ができます。

②豊富な図書・各種資料

学生用図書や視聴覚資料を充実するとともに、蔵書検索システムによる効率的な図書の利用と自動貸出装置による自由な貸し出しができます。これらの図書は、自動化書庫により、大量かつ迅速に図書の配架・搬出が可能となります。

③充実した設備・機器

インターネット時代に即応して、自由に利用できる端末室に計２００台以上のパソコンを増設配備します。大型の視聴覚機器や衛星放送・ケーブルテレビが利用でき、さらに資料作成やプレゼンテーションのために、個人でも編集できる機器を自由に利用できる編集室を設置します。

また、資格試験及び語学学習等の対応のため自習室や少人数でのセミナーもできるよう、多目的な個室を設置するとともに、個人所有のパソコン用に、無線 LAN を館内各階に配置します。

④リテラシー教育支援

また、利用者のための情報検索技術の講習会や論文作成のためのセミナーなど、リテラシー教育支援を利用者のレベルに合わせた内容できめ細かく行うことができます。

（２）研究支援の拡充

①研究用資料の充実

これまでの文献複写サービス業務（ILL）などは、他大学図書館との相互協力や、Web 申し込みにより迅速化を図っておりますが、研究上必要である、電子ジャーナル・二次情報データベース等をさらに計画的に充実させるほか、学内の研究論文等の電子化も支援します。

②研究用図書等の集中管理

関係する学問分野が網羅して利用できるよう、体系的な蔵書整備を計画的に行います。自動化書庫内には、これまでの図書館の蔵書に加え、各研究室の図書を集約することにより、図書館による全学的な集中管理を行い、だれでも利用できるようになります。

（３）電子図書館（ハイブリット化）の促進

電子ジャーナルや二次情報データベース及び情報端末機器の充実のほかにも、情報技術を駆使したマルティメディア対応型の図書館として、学内ネットワークを通じ様々な情報提供や Web サービスを行うことができるようになります。

学内で作成された論文や学術資料や図書館所蔵貴重資料・郷土資料などを逐次電子化・蓄積し、世界に向けて情報発信を行います。

（４）社会貢献・社会連携の強化

図書館はまた文化施設として、所蔵している多数の貴重資料などをエントランスの展示用ケースで公開し、生涯学習施設や博物館・美術館としても社会に開放することができます。

そのほか、総合情報メディアセンターや放送大学との連携により、卒業生や退職者及び地域の住民へのサービスが一層緊密になります。

さらに､質的量的な情報量が増大する中で、他の国立大学図書館等との連携協力や県内の公共図書館との連携協力も格段に充実強化できます。

３．新しい図書館の特徴

（１）先端的な学術情報の中核施設としての役割

学術基盤の中心となる新図書館は、城北、樽味、重信と３つのキャンパスの総合図書館として、分館のほか、各学部の研究室や研究センター等とも直接的に連携強化されます。また、学内の教育支援及び研究支援の中核施設

として､様々な情報･資料を利用者に提供し、国立情報学研究所（NII）や他国立大学図書館等との連携により、世界規模のネットワークを構成することができます。

（２）高度情報化に対応

四国という地域性にかかわらず､新図書館は、最新の情報機器・設備を導入することで、最新のデータを高速に提供できる環境を構築し、先進的な活動が展開できるほか、情報を逐次更新・導入することで、研究水準の維持と、研究分野への貢献を行うことができます。

これらのシステムは同時に、データの保存・管理における高度の情報セキュリティを保障します。

電子機器の能力が向上することで、電子的なデータを整備・保管し、ストレスのないレスポンスで学外の利用者に対して様々な学術情報を発信できます。

これらは、世界的な共同研究をスムーズに行うために、２４時間利用できる体制や国際会議にも対応可能とするものです。

（３）省エネ・機械化施設

図書館蔵書は、全て目録が完備された蔵書検索システムとICチップにより管理します。自動化書庫は、大量の蔵書を少人数で管理することが可能とします。

図書館内は、全館空調により、夏冬快適な学習ができ、明るい照明機器や防音対策も完備し、冷暖房等の管理は一元化し、また未使用部分は自動的に照明・空調を行わない省エネルギー対応とします。

また、障害者や高齢者でも不便なく利用できるようバリアフリーに基づいた設計とし、盗難や火災・事故を防止するため防犯カメラやセキュリティ機器を設置します。地震・台風などに際しても、地域および大学の防災拠点としての機能を有します。

（４）複合施設による文化交流の拠点整備

図書館と総合情報メディアセンター、放送大学が連合することで、大学の情報基盤としての機能のほか、様々なニーズに応えることのできる生涯学習施設としての多様な活動や情報提供を行うことができます。

特に１階エントランス部分は、インフォメーション・コモンズ（情報広場）として、利用者が相互に情報を共有する交流の場とすることができます。ここでは、教育や研究を関して、さまざまな国々の人々と相互にコミュニケーションを取り合うこともでき、インターナショナルな大学環境を作り出しことで、国際交流の場としても活用できます。

もちろん、地域住民や学生との交流の場としても、カルチャーゾーンとして、稽古事や語学研修などを行うことができます。

Ⅳ．新図書館の規模及び組織

１．新図書館

新図書館の延べ面積は、算定によると１７０００㎡が確保できる。（現在８７００㎡）

現在の１階の面積は約１７００㎡であるので、１０階建ての図書館が構想される。

（参考）

国立大学図書館協議会「基準面積積算改定試案（１９９１年６月）」による。

S（積算面積）＝１．８U ＋ ３．５G ＋ ５．３（１．５R － ０．２１U －０．３３６G）＋ ８０T ＋ ５００ ＋ ５００（本館の場合）

U：当該団地の学生定員（城北地区：６８００人）

G：当該団地の大学院生定員（城北地区：７７０人）

R:：当該団地の全蔵書冊数（単位千冊）（城北地区：９８０千冊）

T：受け入れ雑誌タイトル数（単位千タイトル）（城北地区：１３千タイトル）＝１６９７５㎡

２．組織

学術審議会報告により、図書館の組織には、一層の専門的知識を有する職員を配し、機能的かつ積極的な教育支援・研究支援等の活動を行うものとする。

図 書 館 か ら の お 知 ら せ

1. 中央図書館（本館）からお知らせ

「大学院生のための図書館ガイダンス」のご案内

研究には先行研究の調査が欠かせません。図書館を利用すると、効率的に調査が進みます。早めに図書館の使い方を知っておきませんか？

開催期間：4／16（月）～4／20（金）
集合場所：図書館１F レファレンスデスク前（正面カウンターの奥のカウンター）
集合時間：１８：００
申込方法：図書館カウンターで申込用紙に記入、または、下記メールアドレスまで、参加日と参加人数をお知らせください。
メールアドレスgakujutsu@lib.ehime-u.ac.jp

内容：
１．図書館ツアー（見学）18:05-18:30
２．資料の探し方　18:35-19:00
３．データベースの使い方　19:00-19:30
４．学外図書館の利用方法（文献の取り寄せ、訪問）　19:30-20:00

2. 医学部分館からお知らせ

「新入生のための図書館ガイダンス」のご案内

医学科新入生セミナーでガイダンスを行います。
開催日：５／１１（金）
開催時間：14:40～15:20
集合場所：基礎第一講義室

看護学科新入生セミナーでガイダンスを行います。
開催日：５／１１（金）
開催時間：15:30～16:10
集合場所：看護学科第３講義室

「大学院生のための図書館ガイダンス」のご案内

大学院医学専攻「基礎研究方法論Ｉ」でガイダンスを行います。
開催日：４／２４（火）
開催時間：18:00～19:30
集合場所：第一セミナー室

2. 農学部分館からお知らせ

「新入生のための図書館ガイダンス」のご案内

農学部新入生履修指導でガイダンスを行います。
開催日：４／９（月）
開催時間：9:30～10:00
集合場所：農学部大講義室

図書館委員会

○平成 18 年度第 4 回図書館委員会
日時　平成 19 年 1 月 17 日(水)
場所　図書館視聴覚室

[報告事項]
1. 平成 18 度年次計画中間報告について
2. 図書館の懸案事項について
3. 図書の譲渡について

4. 鈴鹿文庫企画展について
5. SciFinder Scholar について
6. 電子ジャーナル ACS, SwetsWise 等の導入について
7. 地域資料古文書の購入について
8. 監事監査について
9. 図書館職員の再雇用について
10. 中国四国地区国立大学附属図書館事務部課長会議について
11. 分館近況報告
12. その他

[審議事項]

1. 電子ジャーナル整備計画等について
2. 図書館将来構想について
3. 総合学生サービスセンター（図書館 1 階）について
4. 平成 19 年度年次計画（案）について
5. 平成 20 年度概算要求について
6. 図書等の除籍について
7. その他

○平成 18 年度第 5 回図書館委員会
日時　平成 19 年 3 月 16 日（金）
場所　図書館視聴覚室

[報告事項]

1. SciFInder Scholar 部局負担について
2. 総合学生サービスセンター（図書館 1 階）について
3. 図書館将来構想について
4. 図書の廃棄について
5. 平成 18 年度愛媛大学図書館学術講演会について
6. 分館近況報告
7. その他

[協議事項]

1. 平成 18 年度年度計画の進捗状況について
2. 平成 19 年度年度計画について
3. 平成 20 年度電子ジャーナル経費（部局負担）について
4. 図書の譲渡について
5. 貴重図書の指定について
6. その他

図書館日誌（人事異動、会議、研修等）

平成 18 年

10 月 17 日～20 日	大学図書館職員講習会（京都大）土出課員出席
10 月 18 日	愛媛大学 SD 研修　三浦課員出席
10 月 19 日～20 日	第 47 回中国四国地区大学図書館研究集会（松江市）仙波 TL 出席
10 月 19 日	平成 18 年度第 4 回農学部分館運営委員会
10 月 25 日	愛媛大学 SD 研修　三浦課員出席
10 月 30 日	中国四国地区国立大学図書館協会実務者会議（岡山大）忽那 TL 出席 中国四国地区大学図書館協会広報調査委員会（岡山大）仙波 TL 出席
11 月 1 日	愛媛大学 SD 研修　三浦課員出席
11 月 2 日	愛媛大学 SD 研修　仙波 TL,三浦課員出席
11 月 6 日	中国四国地区国立大学附属図書館事務部課長会議（岡山大）内山課長出席 愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
11 月 7 日	Serials Solutions 説明会
11 月 8 日	愛媛大学 SD 研修　仙波 TL,三浦課員出席
11 月 9 日	愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
11 月 9 日～10 日	日本医学図書館協会中国・四国地区会総会（高知市）星川 TL 出席
11 月 11 日～19 日	平成 18 年度図書館企画展：鈴鹿文庫の貴重書（企画展示）
11 月 11 日	農学部分館臨時休館
11 月 12 日	平成 18 年度図書館企画展：鈴鹿文庫の貴重書（ワークショップ）
11 月 13 日	愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
11 月 14 日～15 日	平成 18 年度国立情報学研究所教育研修事業国際シンポジウム（広島大）仙波 TL 出席
11 月 15 日	愛媛大学 SD 研修　三浦課員出席

11 月 17 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
11 月 21 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
11 月 22 日　愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
11 月 24 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL,三浦課員出席
11 月 27 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
11 月 29 日　愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
12 月 1 日　平成 18 年度監事監査・内部監査
愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
12 月 4 日　中国四国地区大学図書館協会事業委員会（岡山大）松本 TL 出席
愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
12 月 5 日　平成 18 年度第 2 回医学部図書・情報委員会
12 月 6 日　愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
12 月 6 日～7 日　平成 18 年度会計監査人監査
12 月 8 日　平成 18 年度愛媛大学人事評価者研修　内山課長出席
12 月 11 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
12 月 13 日　愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
12 月 14 日　図書収集事務委員会
12 月 15 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
12 月 19 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
12 月 20 日　愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
12 月 21 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL 出席
12 月 22 日　愛媛大学 SD 研修　仙波 TL,三浦課員出席
12 月 25 日　NPO 法人医学図書館協会「第 14 回基礎研修会」実行委員会（岡山大）星川 TL 出席
12 月 31 日　退職 : 富田専門役

平成 19 年

1 月 1 日　昇任 : 忽那専門役（サービス企画 TL から）
昇任 : 米田農学部分館情報サービス TL（同 SL から）
配置換 : 平岡サービス企画 TL（農学部分館情報サービス TL から）
配置換 : 大石農学部分館情報サービス SL（施設基盤部施設企画課 SL から）
1 月 10 日　愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
1 月 16 日～17 日　防火管理講習　忽那専門役出席
1 月 17 日　第 4 回図書館委員会
愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
1 月 24 日　愛媛大学SD 研修　三浦課員出席
2 月 1 日　国立大学図書館協会中国四国地区協会事業委員会総会（島根大）内山事務課長、松本 TL 出席
2 月 20 日　平成 18 年度愛媛大学図書館学術講演会
2 月 28 日～3 月 2 日　平成 18 年度レファレンス研修（国立国会図書館）三浦課員出席
4 月 1 日　退職 : 内山課長（国際日本文化研究センター情報管理施設資料課長へ）
採用 : 水沼図書館事務課長（高知大学学務部学務課長から）
勤務換 : 土出学術情報課員（医学部分館情報サービス課員から）
昇任 : 筒井資料整備 SL（資料整備課員から）
配置換 : 村上サービス企画課員（農学部事務課総務課員から）
勤務換 : 三浦サービス企画課員（本館情報サービス課員から）
配置換 : 宮部医学部分館情報サービス課員（総合情報メディアセンター事務室電子情報室員から）

（TL : チームリーダー　SL : サブリーダー）

愛媛大学図書館「図書館だより」第 82 号　2007 年 4 月 1 日発行
編　集　：　館報編集委員会　発　行：　愛媛大学図書館
〒790－8577　松山市文京町３番　TEL (089)927－8845
ホームページ : http://www.ehime-u.ac.jp/